

内視鏡室の紹介

仙台市医療センター仙台オープン病院
藤田直孝

仙台市医療センター 仙台オープン病院

責任者：藤田直孝 〒983-0824 仙台市宮城野区鶴ヶ谷5-22-1

概要

■沿革・特徴

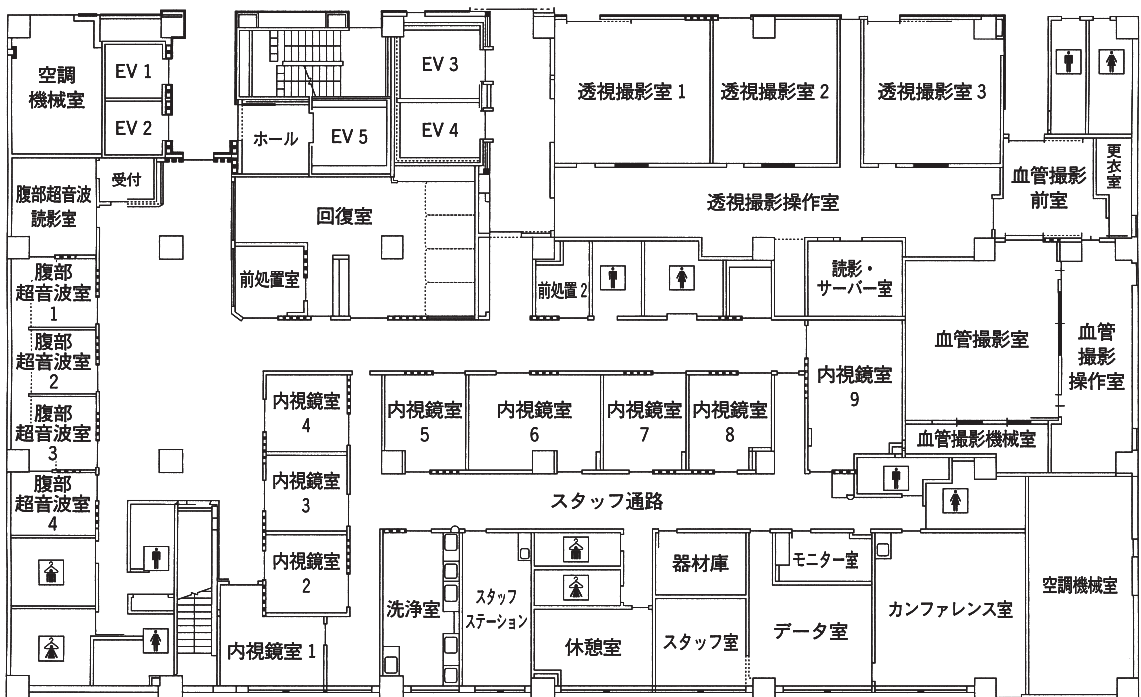
当院は昭和51年、公設民営型の医師会病院として発足した。診療科は消化器内科・外科、循環器内科、心血管外科、呼吸器内科・外科と一般内科という、先鋭特化した病院である。高度医療、救急、健診を事業の3本柱と位置づけ、地域の医療、健康増進に貢献している。平成10年には地域医療支援病院全国第1号の承認を受けている。平成18年3月、同一敷地内での新・改築を終えグランドオープンを向かえた。

このような環境のもと、年間19,000件を越える内視鏡検査、治療を行っており(2006年：上部消化管約10000件、下部消化管約7500件、胆膵約600件、超音波内視鏡約1200件)、上部消化管はもとより下部消化管と胆膵の内視鏡の件数が多いのが特徴である。仙台圏のみならず県内、東北地方の病診連携、病病連携の中心の一つとして役割を担っている。手術例は消化器内科から外科へとシームレスに転科し、こちらも全身麻酔手術が年間900例に達し、さらに増加の傾向をみせている。外科でも積極的に腹腔鏡下手術に取り組んでいる。

■組織

消化器内視鏡センターは独立しており、消化器内科のスタッフが業務に従事している。看護チームは画像診断部として内視鏡と放射線関連の検査、治療に専従しており、内視鏡技師の資格を取得した者も多数在籍している。全病院330床中10床が健診用で、こちらにも消化器内視鏡検査が項目として組み込まれている。

■検査室レイアウト



その他の器材

胆道鏡	
CHF-B 260	1本
CHF-BF 30	1本
気管支鏡	
BF-IT 260	1本
BF-XP 40	1本

実績

(2006年1月～2006年12月まで)

診断

上部消化管	9327件
下部消化管	6477件
EUS(消化管)	565件
EUS(胆膵)	649件

治療

ポリペクトミー(上部)	42件
ポリペクトミー(下部)	867件
EMR(上部)	58件
EMR(下部)	303件
ESD(上部)	162件
ESD(下部)	20件
止血	262件
食道静脈瘤治療	53件
異物除去	27件
食道狭窄拡張	52件
消化器ステント留置術	13件
ERCP 関連手技	562件

指導体制, 指導方針

当施設での消化器内科研修の第一段階は、問診、理学所見の取得に始まり、腹部超音波検査をマスターすること、上部、下部のX線透視検査ができるようになること、上部消化管内視鏡検査、S状結腸内視鏡検査、全大腸内視鏡検査を担当できるようになることなどを到達目標としている。これらを身につけたところでポリペクトミー、内視鏡的粘膜切除術(EMR)、内視鏡的粘膜下層剝離術(ESD)、内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)、超音波内視鏡(EUS)、超音波・EUSガイド下穿刺術、腹部血管造影など、一段高度な検査、治療法の習得へと進む。後期研修の段階では消化器内科医として十分な素養が身につくよう、さらにトレーニングを積んでいくことになる。その後、専門性を追求するという形で、バランスのよい、そして高度の専門性も兼ね備えた消化器内科医、消化器内視鏡医として社会貢献を果たすことを目標に

している。

当科での研修の特徴の一つとして、切除標本の病理学的検討を通じての学習に力を入れている点がある。切除標本は肉眼所見からはじまり剖面像、ルーペ像、病理組織学的所見を検討し、術前の画像診断との対比を徹底的に行う。この作業により何がどの画像にどのように反映されていたのかを理解し、次の診療に生かすようにしている。

このような修練を積むことにより自ずと消化器病学会、消化器内視鏡学会、超音波医学会などの専門医にふさわしい実力が養成される。研修希望者には、臨床研究にも携わりながら常に向上心を持って医療に当たることが要求される。診療上の問題点、よりよい診療は、など、目的意識を持って日々の診療にあたるよう指導している。そして、問題の解決、診断・治療法の優劣などの臨床評価を目的に randomized controlled trial を企画、実行し、その結果を evidence-based medicine の実践に反映させるように努めている。このようにして得られた情報は、積極的に学会発表、論文投稿を行い、広く共有化をはかるようにしている。海外で開催される国際学会へも積極的に演題を持って参加し、英文誌へも論文投稿を行うよう心がけている。

2003年からは治療内視鏡のライブセミナーも年1回開催し、内視鏡手技の普及にも貢献している。

現状の問題点と今後

現状はかなり先進的な体制で診療と臨床研究に臨んでいる。しかし、消化器診療は日進月歩で、内視鏡関連領域も新技術が続々と登場している。最新技術をタイムリーに導入するための予算を確保するのは、現実的には大変な作業である。診療報酬の適正化を強く望むところである。ファイリングシステム、洗浄消毒など、現場の負担により達成されている部分について、関係省庁の理解が待たれる。地域医療の連携の中でさらに情報の共有化を進めることが、消化器内視鏡診療においても不可欠と考えている。

当内視鏡センターの特徴

消化器内視鏡センターは2005年春に全面新築された。総床面積は900平方メートルを越え、国内でも有数の広さを確保し、内視鏡専用室9室、レントゲン併用室3室の計12室を使って診療を行っている。個々の内視鏡検査室は個室化されており、リカバリールームも広さを確保し、受検者のプライバシー、アメニティに十分配慮した環境を準備している。また、患者通路とスタッフ通路も検査室を挟んで隔離されている。スタッフ通路には洗浄室や内視鏡ケース、器材庫が面し、機能的なスタッフの動線が実現されている。

受付と待合のスペースは腹部超音波検査と共用とし、受検者の動線の短縮が図られている。X線室も隣接し総合画像診断・治療部門を形成し、良好な連携の取れる状況にある。救急や病棟からの患者の搬送にも留意して通路、エレベータが配置され、内視鏡センターと短い動線で結ばれるよう工夫されている。

内視鏡検査の画像は各部屋に設置されたHDDレコーダとファイリングシステムに記録される。検査中の内視鏡像はリアルタイムにカンファランス室、スタッフ室に送られ、指導医、研修医が各々の立場で内視鏡研修に活用している。また、センター内にあるデータ室ではこれらの画像情報の検索、集計、ビデオ編集、プレゼンテーションの準備などが容易に行えるよう機器が整備されており、活発な臨床研究活動を支えている。

スタッフ

(2007年4月現在)

医師：指導医4名、専門医2名、医員5名、レジデント7名、研修医3名

内視鏡技師：I種15名、II種4名

看護師：常勤19名、事務職2名、看護助手2.5名

設備・備品

(2007年4月現在)

上部消化管内視鏡

GIF-XK 240	7本
GIF-Q 240 Z	3本
GIF-Q 260	1本
GIF-Q 260 T	1本
GIF-XP 260	1本
GIF-H 260	1本
GIF-XP 260 N	1本
GIF-H 260 Z	1本
GIF-2 TQ 260 M	1本
GIF-2 TK 200	1本
GIF-XK 200	1本
GIF-XT 30	1本
TJF-240	2本
JF-260 V	2本

下部消化管内視鏡

PCF-P 240 AI	1本
PCF-Q 240 ZI	7本
PCF-Q 260 AI	2本
CF-Q 240 I	1本
CF-H 260 AI	2本
CF-AZI	3本
CF-Q 240 ZI	3本

内視鏡治療・処置具

PSD-20	4台
ICC 200 (ERBE)	2台
APC 300 (ERBE)	1台
マイクロターゼ	2台
電気水圧衝撃波結石破碎装置	1台

超音波内視鏡

GF-VE 260	1本
GF-UM 2000	2本
GF-UC 240 P	1本
GF-UMP 230	1本
GF-UMQ 200	1本
CF-UM 20	1本
UM 2 R	2本
UM 3 R	5本
UM-G 20-29 R	2本
UM-S 20-20 R	2本

洗浄機

OER-2	8台
ENDOSONIC	3台

教育用器材

上部消化管, ERCP 研修モデル	1台
大腸内視鏡モデル I-B 型	1台

IT 関連機材

Solemio ENDO(オリンパス)	1式
電子カルテ(セーレン)	1式